

認知症の人々が安心して暮らせる施設にするために ～認知症ケアと環境支援を考える～

介護保険市民オンブズマン機構大阪

〒537-0025 大阪市東成区中道 3-2-34 JAM 大阪 2F

助成事業の概要

1. 実施目的：重度の認知症の人々をよりよく理解しどのように接し対応するかは、介護職員にとって喫緊の課題である。この研修では、認知症についてハードとソフトの両面から学ぶことによって、総合的な理解を深める。さらに、講義で学んだことをもとに、自施設の認知症ケアや環境における課題を見つけ、改善策を検討・実施し、その成果をレポートにまとめることを通して実践力と応用力を培っていく。

2. 時期：①研修 10月21日（土）②トライアル・レポートの提出 11月～12月（編集 1月～2月）

3. 内容：①研修／ドーンセンター 参加者 49人

ハードについては、自宅と施設の環境が大きく異なる点を理解するとともに、考察に役立つツール「施設の環境支援の指針PEAP」や「キャプション評価法」を学んだ。ソフトについては認知症の人々の思いに寄り添う「パーソン・センタード・ケア」を学ぶとともに、認知症の人々の行動理解につなげるための手法である「ケアマッピング」の視点を紹介。具体的な取り組みとして2施設の実践報告も実施した。

②トライアル・レポートの提出／提出者 37人（28施設）

研修終了後、自施設の認知症対応についての課題解決に挑戦し、レポートを提出

事業の成果

1. 施設で暮らす認知症高齢者が、できるだけ自立を維持し、その人らしく暮らせるよう、環境とケア――

ハードとソフトについて一体化して学ぶことにより、認知症への理解と対応を深めることができた。

受講者アンケートでは「大変良かった」（18名、37.5%）「良かった」（23名、47.9%）と、評価する声が85%以上に上った。アンケートには「“目から鱗”で興味深く聞いた」「どの講義も利用者目線で考えているのが分かった」「すべての講義を聞いてヤル気が出てきた」という声もあった。

2. 認知症の人々に対する施設の生活環境を考える講義「認知症高齢者の生活と環境支援」では、「施設の環境支援の指針PEAP」や「キャプション評価法」を学び、グループワークを行うことを通してヤル気につなげることができた。

とくに生活環境の気になるところを「写真に撮って皆で考える」という取り組みは、行動に移すのも容易なため「自施設でも実践できそうだ」「面白い」「職場でも活用したい」という声が多数あった。同時に、「認知症の人々にとって環境がいかに重要であるかが分かった」など、講義のポイントを押さえた感想も多数みられた。

3. 講義「パーソン・センタード・ケアとケアマッピングの視点」は、理念・考え方が中心のためやや難しかったが、「認知症高齢者の立場になって考える大切さ」を伝えることはできた。

アンケートには「認知症の人が“なぜ、そういう行動を取るのか”を考える重要性が分かった」

「問題行動」を全部認知症のせいにしていた」「今日は落ち着かないという申し送りは多いが、その前の行動と職員の対応を知ることの大切さが分かった」「業務優先ではなく、利用者の心を考えないといけないことが分かった」といった真摯な感想も寄せられた。

4. 「トライアル・レポート」の提出を通し、職員自身が課題を見つけ、その改善に取り組むことによって、認知症の人々の変化を肌で感じたり効果を実感したりすることによって、成功体験を培い、仕事へのやる気と応用力アップにつなげていくことができた。

また、提出された「トライアル・レポート」を冊子にまとめることにより、他施設の取り組みを知ることができ、成果・情報を共有することもできた。

成果の広報、公表

1. 介護職員にとって最も難しい認知症ケアについて、「施設の生活環境を見直してみる」というハードの視点と、「介護する側の立場ではなく、「パーソン・センタード・ケア」という、認知症の人の立場から考え対応してみる」というソフトの視点の両面から学ぶことにより、相互的な理解を培うことができた。

受講者の85%から「良かった」「大変良かった」と高い評価を得ることもできた。

2. 講義では考え方を学ぶだけでなく、生活環境では「施設の環境支援の指針PEAP」や「キャプション評価法」、パーソン・センタード・ケアでは「ケアマッピング」の視点を紹介することにより、受講者が自施設での実践につなげるための手法を提供。トライしてみようという前向きな姿勢を育むことができた。

3. 研修で学んだことを活かして職員自身が自施設での課題を見つけ、その改善に取り組む報告す

る「トライアル・レポート」の提出を通し、主体性と応用力のアップにつなげていくことができた。

また、寄せられた「トライアル・レポート」を冊子にまとめることにより、他施設の取り組みを知ることができ、成果・情報を共有することも可能となった。

今後の展開

1. 受講アンケートでは「今後もこの研修があれば、同僚や知人にも勧めたいと思うか」との質問に、85.4%（41名）が「思う」と答えていた。

介護職員の人々のニーズは高いと思われるので、今後も自主事業として開催することを検討していきたい。

2. 受講アンケートでは、「今後研修で学びたいテーマ」として、「医療知識」（13.4%、16名）、「職場でのリーダーシップ」（13.4%、16名）、「利用者・家族・職員とのコミュニケーション」（11.8%、14名）を挙げる声が多かった。

一方で認知症ケアは1.の回答も考え併せ、今後も引き続き重要なテーマになると考えられる。

そのため、受講者の声を反映しつつ、来年度は「認知症ケアを医療的側面から考える ～日々の観察から緊急時の対応まで～」を開講する予定である。また、コミュニケーションやリーダーシップの要望を受けて「介護現場におけるコーチング」についても研修を開催したいと考えている。